小・特　合同

令和３年度

教育研究員研究報告書

教育課題

（オリンピック・パラリンピック教育）

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 ･････････････････････････････････ 1

Ⅱ　研究構想図 ･･･ 2

Ⅲ　研究仮説 ･･ 3

Ⅳ　研究の視点 ･･ 3

Ⅴ　研究の内容 ･･ 3

Ⅵ　検証授業 ･･ 7

Ⅶ　研究の成果と課題 ･･････････････････････････････････････ 16

研究主題

共生社会の実現に向けた教育活動の充実
～東京 2020 大会後も続くレガシーの継承～

Ⅰ　研究主題設定の理由

新型コロナウイルス感染症の影響により一年延期となった東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、「東京2020大会」と表記。）が開催された。世界のトップアスリートがフェアプレーの精神の下に競い合う姿は、見る者に多くの勇気と感動を与えた。

「東京都オリンピック・パラリンピック教育」実施方針（東京都教育委員会　平成28年１月）（以下、「実施方針」と表記。）では、東京都オリンピック・パラリンピック教育（以下、「本教育」と表記。）の意義として、東京が将来にわたり発展していくためには、「年齢、国籍、文化の違いや障害の有無などにかかわらず、あらゆる人々が互いの人権を尊重し合い、共に力を合わせて生活する共生社会を実現していくこと」が必要であると示している。また、「東京2020大会の経験を通じ、その後の人生の糧となるような掛け替えのないレガシーを子供たち一人一人の心と体に残していく」とし、有効な取組を継続していくことの重要性が示されている。

平成28年度から都内全公立学校で実施している本教育は、年間35時間程度の取組を継続し、これまで着実に成果を積み上げてきた。本研究では、これまでの成果を確かなものとし、東京2020大会後も継続していくためには、新しい取組を始めるのではなく、これまでの取組を各教科等の中で計画的に位置付けていくことが重要であると考えた。

東京都教育委員会では、本教育を通じて重点的に育成すべき五つの資質として「ボランティアマインド」「障害者理解」「スポーツ志向」「日本人としての自覚と誇り」「豊かな国際感覚」を挙げている。本研究では、東京都教育委員会が特に共生社会の実現に必要な資質として挙げている「ボランティアマインド」「障害者理解」「豊かな国際感覚」のうち、「ボランティアマインド」と「障害者理解」に焦点化することとした。この二つの資質は、「東京のオリンピック・パラリンピック教育を考える有識者会議最終提言」において「ボランティアマインドの醸成と障害者理解の促進は、家庭や地域への波及が重要である。」と示されるとともに、実施方針の「オリンピック・パラリンピック教育（ボランティア、障害者理解）のレガシーのイメージ　―共生・共助社会の実現―」においても、この二つの資質が互いに関連し合い、社会全体で共生・共助社会の実現につながっていく重要な資質であることが示されているからである。

そこで、この二つの資質における発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿を明確にするとともに、カリキュラム・マネジメントの視点から、二つの資質に関連する各教科等の単元間のつながりを示した単元構成図を基に教育活動を工夫していくことで研究主題に迫ることとした。また、東京2020大会の開催年度であることを生かした授業の工夫についても研究することとした。

以上を踏まえ、研究主題を「共生社会の実現に向けた教育活動の充実～東京 2020 大会後も続くレガシーの継承～」と設定した。

Ⅱ　研究構想図

【教育研究員共通研究テーマ】「これからの社会を主体的・創造的に生き抜いていく子供の育成」

【オリンピック・パラリンピック教育における育成すべき人間像】　◎本研究と関わりの深いもの

○ 自己を肯定し、自らの目標を持って、自らのベストを目指す意欲と態度を備えた人間
○ スポーツに親しみ、知・徳・体の調和のとれた人間
○ 日本人としての自覚と誇りを持ち、自ら学び行動できる国際感覚を備えた人間
◎ 多様性を尊重し、共生社会の実現や国際社会の平和と発展に貢献できる人間

【研究主題】　**共生社会の実現に向けた教育活動の充実**

～ 東京 2020 大会後も続くレガシーの継承 ～

【研究仮説】

「ボランティアマインド」と「障害者理解」の二つの資質における発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿を明確にし、単元構成図を活用して教育活動を工夫することで、児童・生徒のそれぞれの資質を計画的・継続的に育成することができるだろう。

【研究の視点】

＜視点１＞　二つの資質における発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿の明確化
＜視点２＞　二つの資質に関連する単元構成図を活用した教育活動の工夫
＜視点３＞　東京 2020 大会を生かした授業づくり

【研究内容】

【基礎研究】

○教育研究員　過去の研究の分析
○発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿の明確化
○二つの資質に関連する単元構成図の作成

【調査研究】

○「ボランティアマインド」「障害者理解」に関する児童・生徒の意識調査

【検証授業】

○小学校　第４学年　総合的な学習の時間　「まちをみるめ　～みんなにやさしいまち～」
○小学校　第６学年　国語科　「『うれしさ』って何？―哲学対話をしよう」
○就業技術科高等部　第２学年　音楽　「音楽を届けよう」

【検証授業における教育研究員共通の視点】一人１台の学習者用端末の活用場面の設定

Ⅲ　研究仮説

「ボランティアマインド」と「障害者理解」の二つの資質における発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿を明確にし、単元構成図を活用して教育活動を工夫することで、児童・生徒のそれぞれの資質を計画的・継続的に育成することができるだろう。

Ⅳ　研究の視点

研究主題に迫るために、研究の視点として３点設定し、具体的な手だてを考えた。

１　二つの資質における発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿の明確化

教育研究員の過去の研究等を踏まえ、共生社会の実現に必要な「ボランティアマインド」と「障害者理解」の二つの資質における発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿を明確にし、指導計画の立案に役立てる。

２　二つの資質に関連する単元構成図を活用した教育活動の工夫

カリキュラム・マネジメントの視点から、「ボランティアマインド」と「障害者理解」の二つの資質に関連する各教科等の単元間のつながりを示した単元構成図を活用し、各教科等の特性や活動の時期等を考慮しながら、計画的・継続的に教育活動を展開する。

３　東京 2020 大会を生かした授業づくり

東京 2020 大会は、子供たちの人生にとってまたとない重要な機会である。東京 2020 大会の経験を通じ、人生の糧となるような掛け替えのないレガシーを子供たち一人一人の心と体に残せるように、各教科等において、東京 2020 大会を生かした授業づくりを行う。

Ⅴ　研究の内容

１　基礎研究

(1)　教育研究員　過去の研究の分析

教育研究員報告書（平成 27 年度～平成 31 年度（2019 年度））を基に先行研究をまとめた。これらを通して、研究の方向性及び研究の視点等を構想した。（４頁、表１）

(2)　発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿の明確化

教育研究員報告書及び「オリンピック・パラリンピック教育実践事例集」（東京都教育委員会　平成 30 年９月）を基に、「ボランティアマインド」「障害者理解」の二つの資質における発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿を明確にした。（６頁、表２）

(3)　二つの資質に関連する単元構成図の作成

「ボランティアマインド」と「障害者理解」の資質は教育活動全体を通して育まれるものである。そこで、カリキュラム・マネジメントの視点から各教科等の単元間のつながりを明確にした単元構成図を作成した。指導計画作成の際に活用するとともに、各学校のこれまでの取組を構造化して示すことで、東京 2020 大会後も本教育の取組や成果を継承できるようにした。（検証授業参照）

【表１】平成 27 年度から平成 31 年度（2019 年度）までの教育研究員の研究（研究報告書より抜粋）

	平成 27 年度	平成 28 年度
研究主題	オリンピック精神を生涯にわたって生かす児童・生徒の育成 ～オリンピック・パラリンピック教育を通して～	オリンピック・パラリンピック精神を身に付け、自ら行動できる児童・生徒の育成
研究のねらい	平成 28 年度から都内全公立学校でオリンピック・パラリンピック教育が実施されることを踏まえ、どの学校でも実践可能なオリンピック・パラリンピック教育の具体的な学習内容、効果的な指導方法を明らかにする。	オリンピック・パラリンピック教育を充実させるため、次期学習指導要領の視点を踏まえながら、既存の教科や領域の学習において実践できる学習計画や実践事例を明らかにする。また、児童・生徒がオリンピック・パラリンピックに興味・関心をもち、それらの精神をよく知り、主体的に行動できる力を育むことをねらいとした、具体的な授業の展開、改善に取り組み、その方策を提示する。
研究の視点 (◆) 研究仮説 (◇)	◆オリンピック・パラリンピックとの関連の工夫 ◆児童・生徒が主体的・協働的に学ぶ学習を展開する工夫 （◇研究仮説の設定はなし）	◆オリンピック・パラリンピックとの関連の工夫 ◆自ら行動できるようにするための工夫 （◇研究仮説の設定はなし）
目指す子供像	・自らの目標をもち、努力を尽くす児童・生徒 ・交流を通して互いの良さを認め、理解し合う児童・生徒 ・相手のことを考え、公正・公平に接する児童・生徒	・運動・スポーツに親しみ、自己を肯定し、目標をもってベストを目指そうとする児童・生徒 ・日本や外国の文化をすすんで学び、自らコミュニケーションを取ろうとする児童・生徒 ・自然や生態系への影響を考え、持続可能な社会作りに参加しようとする児童・生徒
検証授業	・中学校第２学年　保健体育（体育理論） 「オリンピックの価値について学ぼう」 ・小学校第５学年　総合的な学習の時間 「障害者スポーツをする、みる、支えるために」 ・小学校第５学年　道徳「日本人として」	・中学校第１学年　保健体育科（体育理論） 「運動やスポーツの多様性」 ・小学校第６学年　体育科「器械運動（マット運動）」 ・小学校第６学年　国語科「ようこそ、私たちの町へ」 ・小学校第６学年　理科「生き物のくらしと環境」
成果	①オリンピック・パラリンピックの価値等について学ぶことを通して、オリンピック・パラリンピックが目指すものについて共通理解を図ることができた。 ②推進校の実践報告の調査から、オリンピック・パラリンピックとの関連を明確にした授業づくりの必要性について気付くことができた。 ③都内どの学校でも実践可能なオリンピック・パラリンピック教育の具体化として、三つの授業実践を提案できた。	①オリンピック・パラリンピック精神を身に付け、児童・生徒が自ら行動できるための授業の工夫について明確にすることができた。 ②各教科等に関連付けたオリンピック・パラリンピック教育の実践事例を、四つのテーマに即して示すことができた。
課題	①これまでの授業に、どのようにオリンピック・パラリンピックを関連付けるのか実践事例を増やすとともに、その方法について更に整理する必要がある。 ②「東京のオリンピック・パラリンピック教育を考える有識者会議　最終提言」において、重点的に育成すべき資質として示された、ボランティアマインド、障害者理解、スポーツ志向、日本人としての自覚と誇り、豊かな国際感覚の五つについて、次年度以降は、これらの資質を育むことをねらいとした授業実践を開発し、発信する必要がある。 ③オリンピック・パラリンピック教育を、年間 35 時間程度実施するに当たり、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校において、いつ、どの教科等で、何を、どのように指導するか、年間指導計画に整理し、提案する必要がある。	①各教科の目標を達成しつつ、オリンピック・パラリンピック教育を実施するために、どの単元、どの学習場面で学習読本や映像教材、オリンピック・パラリンピックに関する題材等を活用することが望ましいのかについて検討し、提案していく必要がある。 ②重点的に育成すべき五つの資質は「４×４の取組」においても育成できると示されている。これらの資質の育成につながる実践事例を開発する必要がある。 ③「主体的・対話的で深い学び」の視点やカリキュラム・マネジメントなど、次期学習指導要領のねらいを踏まえ、より一層、主体的に行動する児童・生徒の育成につながる学習計画や実践事例を検討していく必要がある。

※　抜粋した内容の選択は、本研究の部員による。令和２年度は教育研究員事業を実施していない。

	平成 29 年度	平成 30 年度	平成 31 年度（2019 年度）
研究主題	オリンピック・パラリンピックへの参画意識を高め、共生社会を目指す教育の在り方	共生社会の実現に向けた豊かな国際感覚の醸成　～各教科等におけるレガシーとなる授業の工夫～	共生社会の実現に向けた授業の工夫と改善～五つの資質の育成を授業に関連付けて～
研究のねらい	学習指導要領の視点を踏まえながら、既存の教科や領域の学習において実践できる、12 年間の指導計画や実践事例を明らかにする。また、児童・生徒がオリンピック・パラリンピックへの興味・関心を高め、それらの精神をよく知り、身に付け、主体的に行動できる力を育むことをねらいとした授業の展開・改善に取り組み、その方策を提示する。	オリンピック・パラリンピック教育の充実を資するため、学習指導要領の視点を踏まえながら、「豊かな国際感覚」とは何かを明らかにする。その上で、既存の教科や領域の学習において実践できる、小学校第１学年から高等学校第３学年までの 12 年間の指導計画や実践事例を明示する。	共生社会の実現に向けて、本教育を通して育成すべき五つの資質のうち、「ボランティアマインド」「障害者理解」「豊かな国際感覚」において、発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿を明らかにする。その上で、各教科・科目に関連付け、児童・生徒それぞれの資質を育むための授業の工夫すべき点を明示する。
研究の視点（◆）研究仮説（◇）	◆東京 2020 大会への参画意識を高め、その後のレガシーとなる指導の工夫 ◆「ボランティアマインド」「障害者理解」の二つの資質を育むための工夫 （◇研究仮説の設定はなし）	◆「豊かな国際感覚」を育むための発達段階に応じた指導の工夫 ◆東京2020大会以降にレガシーとなる授業づくり ◇「豊かな国際感覚」の捉えを明らかにした上で、現在行っている教育活動を発展させ、発達段階に応じて計画的・継続的に行うことで、「豊かな国際感覚」が醸成されるだろう。	◆東京2020大会以降にレガシーとなる授業づくり ◇「ボランティアマインド」「障害者理解」「豊かな国際感覚」における発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿を明確にし、各教科・科目に関連付けた授業を継続的に行うことで、児童・生徒のそれぞれの資質が育成されるだろう。
目指す子供像	①社会に貢献しようとする意欲や他者を思いやる心をもつことができる児童・生徒 ②「支える」心と自尊感情をもつことができる児童・生徒 ③障害の有無にかかわらず、多様性を尊重し、共に力を合わせて生きる共生社会を実現しようとする児童・生徒	①自他を尊重し、多様な他者と協働しながら、目標に向かって創造・挑戦しようとする生徒 ②日本と世界の国々や人々を尊重し、それぞれがもつ歴史や文化への誇りを創造しながら、理解をより深めようとする生徒 ※中学校を抜粋	①自分を価値ある存在として捉え、自ら地域に貢献しようという気持ちをもち、自分にできることに取り組もうとする。 ②それぞれの特性を理解し、誰に対しても公平に接しようとする。 ③世界各国・地域の文化に対する理解を深め、進んで外国の人と交流しようとする。 ※中学校を抜粋
検証授業	・小学校第１学年　体育科 「バンバンゲーム　とよにしピック」 ・高等学校第１学年　音楽科 「我が国と諸外国の歌を歌おう」 ・高等学校第1学年　保健体育科（体育理論） 「オリンピズムとオリンピック・パラリンピックムーブメント」	・小学校第５学年　特別の教科　道徳 「ブランコ乗りとピエロ」 ・中学校第1学年　技術・家庭　技術分野 「生活に役立つものをつくろう」 ・肢体不自由特別支援学校高等部 知的障害を併せ有する生徒の教育課程 生活単元学習「食文化-インスタント食材」	・小学校第５学年　社会科 「自動車をつくる工業」 ・中学校第２学年　特別の教科　道徳 「島耕作～ある朝の出来事～」 ・高等学校第１学年　国語科 国語総合　現代文「空気を読む」
成果	①「ボランティアマインド」「障害者理解」の資質を育むために、発達段階に応じた目指す児童・生徒の具体的な姿を明らかにできた。また、本教育と各教科の目標達成を両立して実践する系統的・横断的で 12 年間見通した指導計画を作成することができた。 ②東京2020大会へ向けた授業提案とともに、選手の招へい等がなくとも本教育を実践できるように、系統的な指導計画を提案することができた。 ③これまで行われてきた教育活動に、本教育の目指す資質・能力を関連付けて実践するための方向性を明らかにした。	①「多様性を受け入れる力」は一単位時間の中での高まりを見取ることは難しいが、各教科・領域の中で少しずつ育まれていることを示した。また、明確な評価基準がないため、発達段階に応じた目指す児童・生徒像を設定し、具体的な単元名・題材名を提案することができた。 ②大会後も長く続く教育活動になることを見据え、様々な校種、教科・領域で活用できる具体的な方法を提示することができた。	①発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿を明確化したことで、教科の目標と関連付けながら、単元における育成すべき資質を定めやすくなった。 ②共生社会の実現に必要な資質を育成するための指導計画を作成することで、本教育と関連付けやすい教材や単元を選定し、授業の工夫と改善の方法を実践例として示すことができた。 ③児童・生徒に、授業の中で育成すべき資質に対応した自己評価を行わせることで、自らの成長や課題を達成すべき基準に照らして実感させることができ、授業改善につなげることができた。
課題	①小学校、中学校、高等学校、特別支援学校での児童・生徒の参画意識の高まりの見取り方について、研究を深めていく必要がある。 ②本教育の内容を都内各校へ広く周知しながらより多くの児童・生徒に普及させていく必要がある。	①多くの児童・生徒が抱いている「国際感覚といえば英語力」という狭いイメージを、「他者理解」、「自己理解」を含めた広いイメージで捉えられるようにしていくことが今後の課題である。 ②東京 2020 大会までの取組で得られた教育課程や指導の工夫を、レガシーとして継続・発展させていくことが重要である。	①発達段階における目指す児童・生徒の姿を活用し、教科等横断的な視点で計画的・継続的に授業を行っていく必要がある。 ②自己評価の基準によって、教員の意図を推察しすぎたり、柔軟な発想をしにくくなったりすることがあるため、内容を十分に吟味し、年間を通じて計画的・継続的に活用していくことが必要である。

※　抜粋した内容の選択は、本研究の部員による。令和２年度は教育研究員事業を実施していない。

【表２】発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿

○「ボランティアマインド」

発達段階	目指す姿
小学校（第１・２・３学年）	自分を価値ある存在として捉え、積極的に身近な人に思いやりをもって接しようとする。
小学校（第４・５・６学年）	自分を価値ある存在として捉え、積極的に周りの人に思いやりをもって役割を果たそうとする。
中学校	自分を価値ある存在として捉え、自ら地域に貢献しようという気持ちをもち、自分にできることに取り組もうとする。
高等学校	自分を価値ある存在として捉え、主体的に社会貢献に参画しようとする。

○「障害者理解」

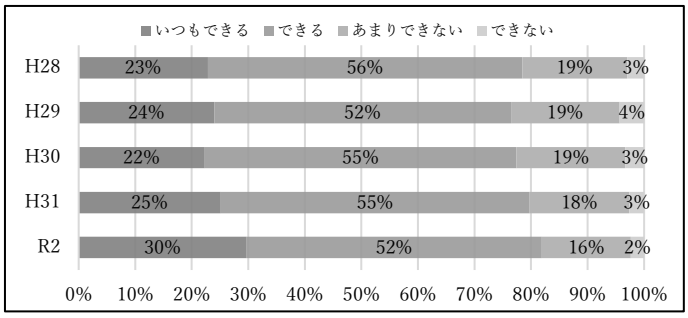
発達段階	目指す姿
小学校（第１・２・３学年）	互いの違いを知り、誰に対しても公平に接しようとする。
小学校（第４・５・６学年）	互いの違いを理解し、誰に対しても公平に接しようとする。
中学校	それぞれの特性を理解し、誰に対しても公平に接しようとする。
高等学校	互いの特性を尊重し、共に助け合い、支え合って行動しようとする。

※　「オリンピック・パラリンピック教育実践事例集」（東京都教育委員会　平成30年９月）、教育研究員報告書（平成31年度（2019年度））を基に作成

２　調査研究

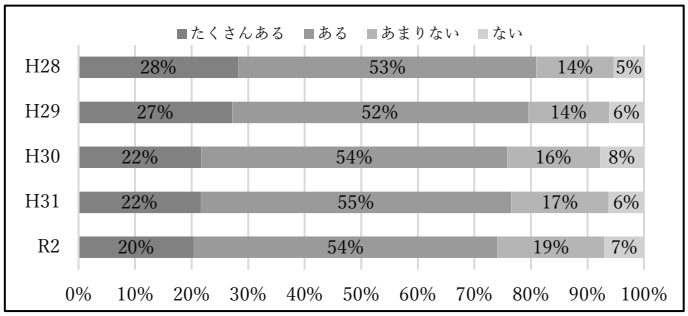
令和２年度オリンピック・パラリンピック教育アンケート調査報告書（東京都教育委員会　令和３年３月）より一部抜粋

設問　人が困っているときは、すすんで助けることができますか。



＜ボランティアマインド＞
○「ボランティアマインド」の設問では、「人が困っているときは、すすんで助けることができますか。」の問いに約80%の児童・生徒が「いつでもできる」「できる」と回答した。

設問　高齢者や障害のある人と交流したことがありますか。



＜障害者理解＞
○「高齢者や障害のある人と交流したことがあるか」の設問では、約75%の児童・生徒が「たくさんある」「ある」と回答した。

部員の所属校において同じ調査を実施したところ、同様の結果が得られた。

本調査結果を分析すると、これまでの取組を通して「ボランティアマインド」「障害者理解」の資質が育ち、多くの児童・生徒が高齢者や障害のある人と交流した経験があることが分かる。東京2020大会は、多様性を尊重し、相互理解を深める中で障害者理解の資質を高めたり、ボランティアマインドについて考えさせたりするまたとない機会である。本研究では、二つの資質をより一層育むために、東京2020大会を生かした授業づくりについても研究することとした。

Ⅵ　検証授業

実践１　小学校第４学年　総合的な学習の時間

１　単元名

まちをみるめ　～みんなにやさしいまち～

２　単元の目標

身近なバリアフリーや、より多くの人が共に利用するための製品について調べることを通して、障害への理解を深め、障害のある人もない人も共に生きていくために必要なことについて考えるとともに、自らの行動に生かすことができるようにする。

３　単元の評価規準

知識・技能（知）	思考・判断・表現（思）	主体的に学習に取り組む態度（主）
①だれもが住みやすい社会にするための自治体の取組や工夫を理解している。 ②様々な障害があることを知るとともに、多様な人が社会の中で生活していることを理解している。 ③目的に応じた情報収集、表現の方法を理解している。	①だれもが住みやすい社会にするために、多様な視点から考え、課題を見いだしている。 ②バリアフリーマップ、共用品などから、課題解決に必要な情報を集め、整理・分析し追究している。 ③自分が考えたバリアフリーや共用品について分かりやすくまとめたり、表現したりしている。	①だれもが住みやすい社会にするために、自分たちのまちのバリアフリーや共用品から、住みやすいまちづくりについての課題解決的な学習に協働的に取り組もうとしている。

４　単元について

本単元では、障害のある人だけでなく、高齢者や乳幼児など、多様な人々が共に生活しやすいまちにするために、どのような取組や工夫がなされているかを知り、社会の一員として何ができるかを考えさせる。また、共生社会を形成するための素地の一つとして共用品を取り上げ、共用品が生まれた背景や開発者の思いなども調べたり、自分たちが考える共用品を創ったりする学習を通して、障害者理解を深める。そして、障害のある人が暮らしやすい社会は、だれにとっても暮らしやすい社会であることを気付かせる。

５　研究主題に迫るための手だて

＜視点１＞　二つの資質における発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿の明確化

表２（６頁）に示した目指す児童・生徒の姿に迫るために、以下の指導を行う。

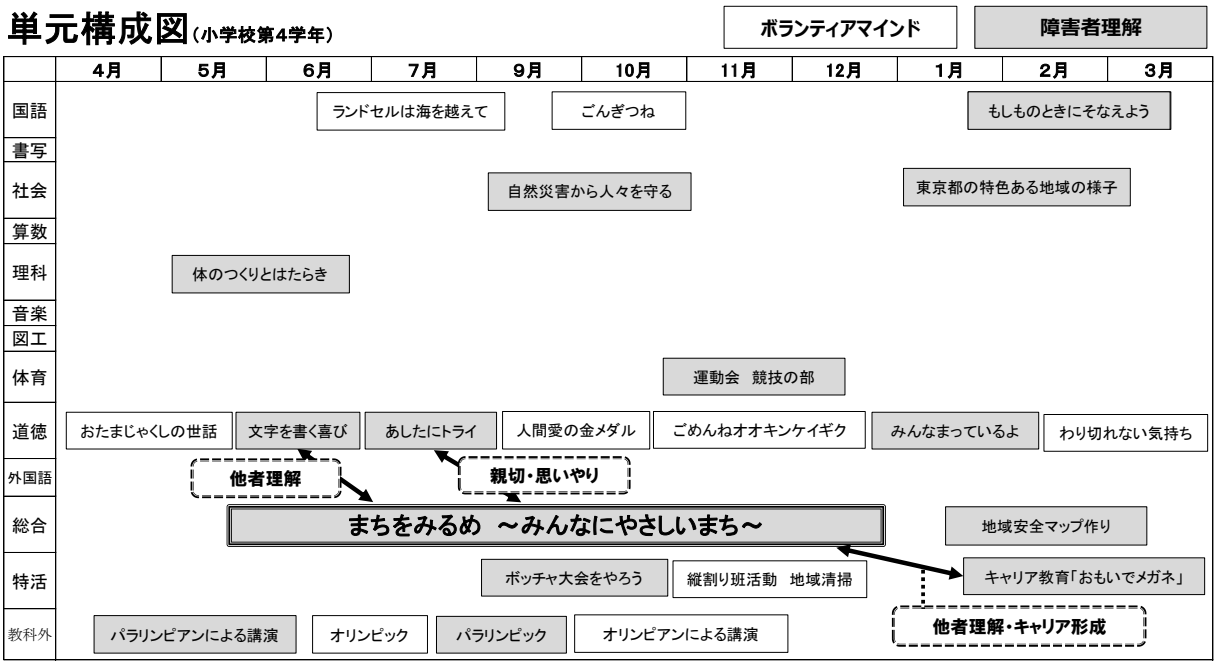
(1)　地域の公共施設にあるバリアフリーを調べる活動を行うことで、地域のまちづくりへの取組を知り、障害のある人の生活を意識し、思いやりをもって人と接しようとする気持ちを育てられるようにする。

(2)　共用品の工夫を調べたり、工夫のアイディアを出したりする活動を設定し、障害のある人だけでなく、誰もが使いやすい商品にするための工夫に気付き、共に助け合い、支え合って生きる力を育成する。

＜視点２＞　二つの資質に関連する単元構成図を活用した教育活動の工夫

総合的な学習の時間「まちをみるめ」を中心に国語科や特別の教科　道徳、学級活動と関連させながら学習指導計画を作成し、計画的・継続的に資質を育成できるようにした。（図１）

教科等	学習内容
総合的な学習の時間	企業と地域が連携している企画「まちをみるめ」を単元の導入とし、自分以外の他者の視点から学校・まちを観察し、多様なものの見方を養う。
特別の教科　道徳	「文字を書く喜び」（廣済堂あかつき）を通して、障害についての理解を深める。
夏季休業期間	地域にあるバリアフリーを観察する課題を設定し、社会貢献への意欲付けにつなげる。
学級活動	「おもいでメガネ」（主婦の友社）の絵本を読み、思いやりをもって人と接することの大切さを理解させたり、将来の生き方の考えと基盤になるようにしたりする。



【図１　二つの資質に関連する単元構成図（小学校第４学年）】

＜視点３＞　東京2020大会を生かした授業づくり

(1)　地域の施設や、オリンピックスタジアム、鉄道会社など東京2020大会に向けて整備されたバリアフリーを調べる活動を通して、障害の有無にかかわらず、だれもが生活しやすい社会づくりの重要性に気付かせ、障害者理解を深める。

(2)　東京 2020 大会で注目を浴びたパラリンピアンの映像等を紹介し、オリンピック・パラリンピックの意義、共生社会の重要性について理解を深める。

６　単元計画と評価計画（全19時間）

時	●主な学習活動	評価規準	○オリンピック・パラリンピック教育との関連 ☆他教科との関わり
第１時 ～ 第２時	●「まちをみるめ」についてゲストティーチャーからオリエンテーションを受け、学習の見通しをもつ。 ●星野富弘さんについての資料から、障害のある人の生き方について考える。	主①	○多様性の尊重 ☆道徳「文字を書く喜び」
第３時 ～ 第７時	●バリアフリーについて書かれている新聞記事から「バリアフリー」とは何か、どのようなものがバリアとなるのかについて考える。 ●学校の中のバリアとバリアフリーについて考える。 ●学習者用端末を使って、学校のバリアやバリアフリーを撮影し、校内のバリアフリーについて学級内で共有する。 ●バリアフリーや、バリアについての学んだことをワークシートにまとめる。 ●ワークシートの内容をもとに、プレゼンテーションソフトを使って、発表の資料を作成し、友達同士で交流する。 ●自分たちの住むまちや利用する施設にあるバリアやバリアフリーについて調べる。（課外時間含む）	知② 思① 知③ 主① 思①	○障害のある方の生活を考え、互いの違いを理解する。 ○積極的に周りの人に思いやりをもって自分ができることを考える。 ○友達と意見を交流し、自分と異なる意見を理解する。 ○まちにあるバリアフリーに目を向けることで、相手の立場に立って考える。 ☆夏季休業期間中の自主課題
第８時 ～ 第13時	●オリンピックスタジアムや東京 2020 大会に向けて整備されたバリアフリーについて知る。 ●自治体のホームページに掲載されている「バリアフリーマップ」から、自分が注目した施設にどのようなバリアフリー設備があるか、さらにどんなバリアフリーがあるとよいかを調べ、まとめる。 ●注目した施設にないバリアフリーから、「こんなバリアフリーがあればいいな」という視点でワークシートにまとめる。 ●プレゼンテーションソフトを活用して、バリアフリー施設についての学習のまとめを発表する。 ●パラリンピアンの成田真由美選手の映像や資料から、成田選手の生き方について考える。	知① 思② 主① 思③ 思③ 知②	○東京 2020 大会におけるバリアフリーについて知り、障害者理解を深める。 ○まちにあるバリアフリーに目を向けることで、相手の立場に立って考える。 ○互いの違いを理解し、だれもが公平に生活できるための考えを広げる。 ○パラリンピアンについて知り、互いの違いを理解する。 ☆道徳「あしたにトライ」

第14時 ～ 第19時	●障害には医学モデルと社会モデルという考え方があることを知る。 ●障害のある人にとって家の中でどんなことが不便になるのか、意見を発表し合い、課題を設定する。 **●共用品の工夫を調べ、共用品について知る。（本時）** ●映像資料：「使いやすさを広めたい」を視聴し、共用品の開発者の思いを知った上で、共用品に触れる。 ●どんな共用品があるとよいか、共用品のアイディアを出し合う。 ●今までの学習を振り返り、障害の有無にかかわらず、その人らしさを認め合い、みんなにやさしい社会にしていくために大切なことは何かについて自分の考えをまとめる。 ●みんなにやさしい社会にしていくために大切なことについて自分の考えを発表し、友達の考えを知る。	知② 思② 知③ 思③ 思③ 主①	○互いの違いを理解する。 ○相手の立場に立って考え、自分ができることを考えている。 ○バリアフリーの必要性を思い出し、互いの違いを理解している。 ○共に助け合い、支え合って生きることの大切さに気付く。 ○様々な人の立場に立って考え、自分ができる役割を考える。 ○話合いを通して、自分の考えを深める。

7　本時（19時間中15時間目）

(1)　本時の目標ねらい

様々な人の違いを理解し、共用品にはその違いを助けるための工夫があることに気付く。

(2)　本時の展開

時間	学習活動	◇学習活動の支援　■評価 ○オリンピック・パラリンピック教育との関連
導入 10分	1　前時までの学習について振り返る。 ・オリンピックスタジアムにはカームダウン室がある。 ・車いす席が多い。 2　障害のある人が生活する上で、困ることについて発表し合い、課題を設定する。	◇オリンピックスタジアムのバリアフリー施設や、パラリンピアンの映像を示す。 ○バリアフリーの必要性を思い出し、互いの違いを理解している。 ◇学習者用端末を活用して、児童の意見を可視化し、全体共有をしやすくする。
	身の回りの道具や物にある工夫を見付けよう	
展開 30分	3　牛乳パックを見分ける工夫について知る。 4　他の共用品について、誰が、どのような時に、どのように便利になるのかという視点で工夫を見付ける。 5　見付けた工夫について全体で共有する。	◇工夫されている牛乳パックと他の紙パック製品を提示し、比較することで工夫に気付くことができるようにする。 ◇工夫が分かりやすい共用品を提示する。 ◇学習者用端末を活用して、児童一人一人が共用品の写真を手元で自由に見られるようにする。 ■共用品の工夫は、障害のある人だけでなく、だれもが使いやすくするために考えられていることに気付く。
まとめ ５分	6　本時の学習について感想を書く。 7　次時の見通しをもつ。	◇学習感想を書き終えた児童は、学習者用端末で友達へコメントを送ったり、もらったりすることでさらに考えを深められるようにする。 ◇共用品の開発者を紹介し、次時の見通しをもてるようにする。

8　考察

(1)　成果

ア　身近なバリアフリーや共用品を調べるという学習活動を設定することで、児童が主体的に学習に取り組み、様々な人の違いを考えることができた。またバリアフリーや共用品の提案をすることは、自分たちが今できることを考える機会となりボランティアマインドの醸成にもつながる学習活動とすることができた。

イ　二つの資質を高めるために、総合的な学習の時間の単元中に道徳の授業を計画し、障害者やパラリンピアンの心情を捉えながら学習を進めることで二つの資質を育む効果的な指導となった。

ウ　オリンピックスタジアムのバリアフリーの映像や、東京2020大会に向けて整備された新しいバリアフリーの取組を知り、バリアフリーの必要性を意識付けることができた。

(2)　課題

「障害者理解」や「ボランティアマインド」について知り、意識を高めることができたが、この意識を更に高め、行動につなげるためには、様々な交流活動と関連付けながら、学校全体で計画的・継続的に指導することが必要である。

実践２　小学校第６学年　国語科

１　単元名

あなたはどう感じる？

ぼくの世界、君の世界

「うれしさ」って何？―哲学対話をしよう

２　単元の目標

感じ方や考え方の違いを話し合うことを通して、一人一人がもっている心の世界に目を向ける。

３　単元の評価規準

知識・技能（知）	思考・判断・表現（思）	主体的に学習に取り組む態度（主）
・原因と結果など情報と情報との関係について理解している。	・話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめている。	・積極的にお互いの考えや意見を関連付けて述べ合い、今までの学習を生かして共通点や相違点をもとに分類しようとしている。

４　単元について

三つの小単元から構成されており、まず、「あなたはどう感じる？」では、身近なテーマから感じ方の違いについて気付き、次に、「ぼくの世界、君の世界」では、筆者の体験や事例をもとに「心の世界」という抽象的な世界に目を向け、そして、「『うれしさ』って何？―哲学対話をしよう」では、一つの「正解」を求めるのではなく、違いを意識しながら意見交流することで、自分自身を振り返ることができるようにした。本単元では、体育科で車いすバスケットボールの疑似体験を設定したり、特別の教科　道徳の「親切、思いやり」の学習と関連付けたりして、「障害者理解」と「ボランティアマインド」の資質を高められるようにした。

５　研究主題に迫るための手だて

＜視点１＞　二つの資質における発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿の明確化

表２（６頁）に示した目指す児童・生徒の姿に迫るために、以下の指導を行う。

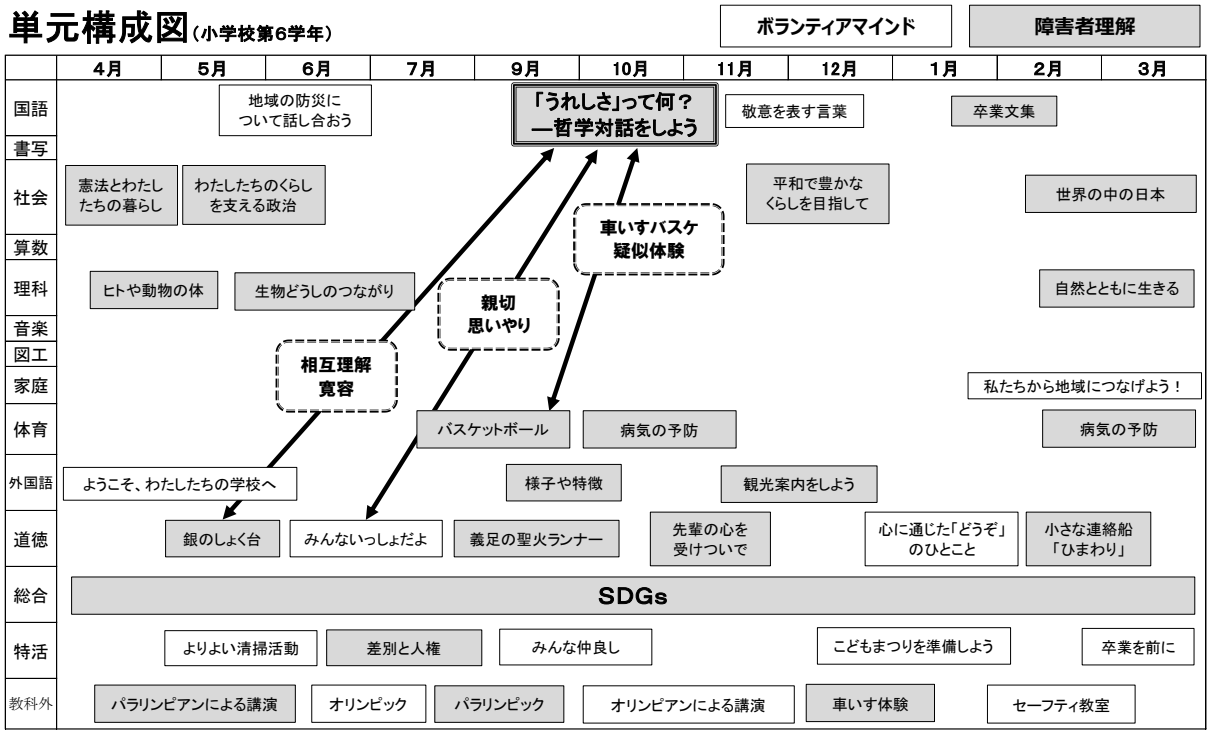
(1)　車いすバスケットボールの疑似体験を通して感じたことを話し合う中で、座ることでの困難さに気付かせるとともに、車いすの人と出会ったらどんなことができるのか考えさせ、思いやりをもって人と接しようとする気持ちを育む。

(2)　「正解」のない話合い活動を通して、同じ経験をしても「それぞれに考えがあり、みんな同じ考えをもっているわけではない」ことに気付かせ、「互いの違いを理解し、誰に対しても公平に接しようとする」態度を育成する。

＜視点２＞　二つの資質に関連する単元構成図を活用した教育活動の工夫

国語科「『うれしさ』って何？―哲学対話をしよう」を中心に体育科や特別の教科　道徳と関連させながら学習計画を作成し、計画的・継続的に資質を育めるようにした。（図２）

教科等	学習内容
国語科	「正解」を求めるのではなく、話合い活動を通して、お互いの違いに気付き、自分自身を振り返る活動に取り組み、様々な考え方を尊重する態度を育む。
体育科	「バスケットボール」の単元の最後にパイプ椅子に座ってシュートする体験を通して、座ることでの困難さに気付かせる。
特別の教科　道徳	「銀のしょく台」「みんないっしょだよ」（東京書籍）を通して、自分と異なる意見や立場を尊重したり、相手を思いやり、進んで親切にしたりする意欲や態度を育てる。



【図２　二つの資質に関連する単元構成図（小学校第６学年）】

＜視点３＞　東京 2020 大会を生かした授業づくり

(1)　東京 2020 大会の開会式のハイライト動画を視聴した感想を伝え合うことを通して、同じ動画を見ても他の人と感じ方が違うことに気付かせるとともに、オリンピック・パラリンピックの意義について意識させる。

(2)　車いすバスケットボールの試合動画を基に、車いすバスケットボール選手の動きと自分たちが疑似体験した時を比べて、自分の感じている困難さは、本当に相手も感じている困難さか考えさせ、「ボランティアマインド」とは何か考えさせる。

６　単元計画（全 10 時間）

時	●主な学習活動	・評価規準	○オリンピック・パラリンピック教育との関連 ☆他教科との関わり
第1時	●東京 2020 大会の開会式や犬と猫の会話等を基に自分たちにもある感じ方や考え方の違いについて話し合う。	・情報と情報との関係付けの仕方、図による語句と語句の関係の表し方を理解し使っている。（知）	○開会式の感想を書き、友達と交流し、感じ方の違いを知る。
第2時 ～ 第6時	●「ぼくの世界、君の世界」を読んで、初発の感想を書き、学習の見通しをもつ。 ●文章構成について、どれが適切か選ぶ。 ●事例を見付け、どの事例が納得できるか考える。 ●筆者の意見に対して納得したことや意見を書き、グループで交流する。	・進んで筆者の考えに気を付けながら、「心の世界」について考えようとしている。（主） ・情報と情報、図による語句と語句の関係の表し方を理解し使っている。（知） ・目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりしている。（思） ・文章を読んで理解したことに基づいて、自分の意見をまとめている。（思）	○人それぞれの「心の世界」があることに気付く。 ○人によって納得する度合い、考えに違いがあることを知る。 ○考えによって、選択肢が違うことを知る。 ○それぞれ違う考えがあることを知る。
第7時 ～ 第10時	●車いすバスケットボールの疑似体験をする。 ●椅子に座るのと座らないのとで、どのように違うか自分の考えをまとめる。 **●前時の意見をもとに、グループで話し合う。（本時）** ●単元の学習のまとめをする。	・原因と結果などの情報と情報との関係について理解している。（知） ・体験したことに基づいて、自分の意見をまとめている。（思） ・お互いの考えや意見を関連付けて述べ合い、共通点や相違点についてまとめようとしている。（主） ・今まで学習してきたことに基づいて、自分の意見をまとめている。（思）	○いすを活用して車いすバスケットボールの疑似体験をする。 ☆体育科「バスケットボール」 ○いすに座ることで、どのようなことに困るか考える。 ☆道徳「みんないっしょだよ」 ○自分の意見と他の人の意見を比較しながら聞く。

7　本時（10 時間中９時間目）

(1)　本時の目標

互いの考えや意見を関連付けて述べ合い、共通点や相違点についてまとめようとしている。

(2)　本時の展開

時間	学習活動	◇学習活動の支援　■評価 ○オリンピック・パラリンピック教育との関連
導入 ５分	1　車いすバスケットボールの疑似体験を思い出す。 ・座ってシュートをするのは、難しい。 ・ボールがリングから落ちてきて、怖かった。 ・意外と簡単にできた。 **感じ方の共通点や相違点から、考えの違いについてまとめよう**	◇　疑似体験した時の動画を見せ、その時の経験を思い出せるようにする。
展開 30 分	2　グループの中で、感想を交流する。 ・難しく感じた所は一緒だね。 ・人によってできる、できないが違う。 3　グループ以外の人と、感想を交流する。 ・感想が同じだった人がたくさんいた。 ・違う点もあった。 4　交流した結果を、クラスで交流する。 ・グループによって、話し合った内容が違う。 ・同じことを言っているのに、考えていることが違う。	◇共通点や相違点を観点に、グループで話し合うように声を掛ける。 ○自分と友達の考えを比較して、お互いの考えには違いがあることを理解している。 ■互いの考えや意見を関連付けて述べ合い、共通点や相違点についてまとめようとしている。（主）
まとめ 10 分	5　本時のまとめをする。 ・困っている人がいたら、優しく声を掛けたい。 ・世界と戦っているパラリンピアンの動きはすごい。 ・自分では困っていると思っても、相手は困っていないかもしれない。そのことも忘れないようにしながら、声を掛けられるようにしたい。	◇「大変そう。」という感想で終わらせるのではなく、大変そうな人がいたら、どんな行動をするとよいのかを考えるように促す。 ◇東京 2020 大会での車いすバスケットボールの試合の動画を見せ、自分とアスリートの動きの違いを実感させる。 ○困っている人がいたら、相手の気持ちも考えた上で、自分から声を掛けられるようにする。

8　考察

(1)　成果

ア　体育科と関連付けて体験活動を設定したことで、自分と相手の考えの共通点と相違点が明確になる意見交流ができて教科の目標を達成するとともに、障害者理解も深めることができた。

イ　「どのようなことが大変なのか。」ということが分かることで、「自分だったら、相手のために何ができるのか。」という思考に向かうことが分かった。つまり、「障害者理解」が深まることで「ボランティアマインド」の力が高まることが分かった。

ウ　一人１台の学習者用端末を使用し、東京 2020 大会のハイライト動画を視聴したことで、意欲的に活動することができた。他競技動画も視聴し、個々のニーズに合わせた授業を展開できた。

(2)　課題

「ボランティアマインド」を高めることはできたが、具体的な行動につなげていくための場面設定がなかった。カリキュラム・マネジメントの視点から、特別の教科　道徳と関連付け、具体的な場面を設定して、行動できるように促していく必要がある。

実践３　就業技術科高等部第２学年　音楽

１　題材名

音楽を届けよう

２　題材の目標

・箏の音色や奏法の特徴を理解し、他者との調和を意識して演奏する技能を身に付ける。

・箏や和太鼓の音色や旋律、リズム、速度を知覚し、その雰囲気を感受しながらどのように演奏するかについて思いや意図をもつことができる。

・ＩＣＴ機器を活用し、動画やリモートで音楽を届けることを企画し、音楽活動を楽しみながら主体的に取り組む。

３　題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・曲想や和楽器の音色や奏法との関わり、我が国の伝統音楽の特徴について理解している。【知】 ・曲にふさわしい奏法、体の使い方、他者との調和を意識して演奏する技能を身に付け、器楽で表している。【技】	・箏や和太鼓の音色や旋律、リズムや速度を知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気を感受しながら音楽のよさや美しさを自ら味わって聞き、どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。【思】	・高齢者施設とリモートで音楽を届けることを企画し、箏や和太鼓の音色や奏法に関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に表現や器楽の学習内容に取り組もうとしている。【主】

４　題材について

本題材で特に関連している特別支援学校高等部学習指導要領（平成 31 年２月）の内容

２　各段階の目標及び内容　○２段階
(1)　目　標
ウ　主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習に取り組み，音楽活動の楽しさを体験することを通して，音楽文化に親しむとともに，音楽によって生活を明るく豊かなものにしていく態度を養う。
(2)　内　容
イ　器楽の活動を通して，次の事項を身に付けることができるよう指導する。
(ｱ) 器楽表現の知識や技能を得たり生かしたりしながら，器楽表現を創意工夫すること。
(ｲ) ㋑創意工夫を生かし，全体の響きや各声部の音などを聴きながら，他者と合わせて演奏する技能

音楽は、多様な人とのコミュニケーションツールになり、人との関わりを広げる手段となる。コロナ禍においてもリモートで音楽を届け、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に表現しようとする態度を養う。

５　研究主題に迫るための手だて

＜視点１＞　二つの資質における発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿の明確化

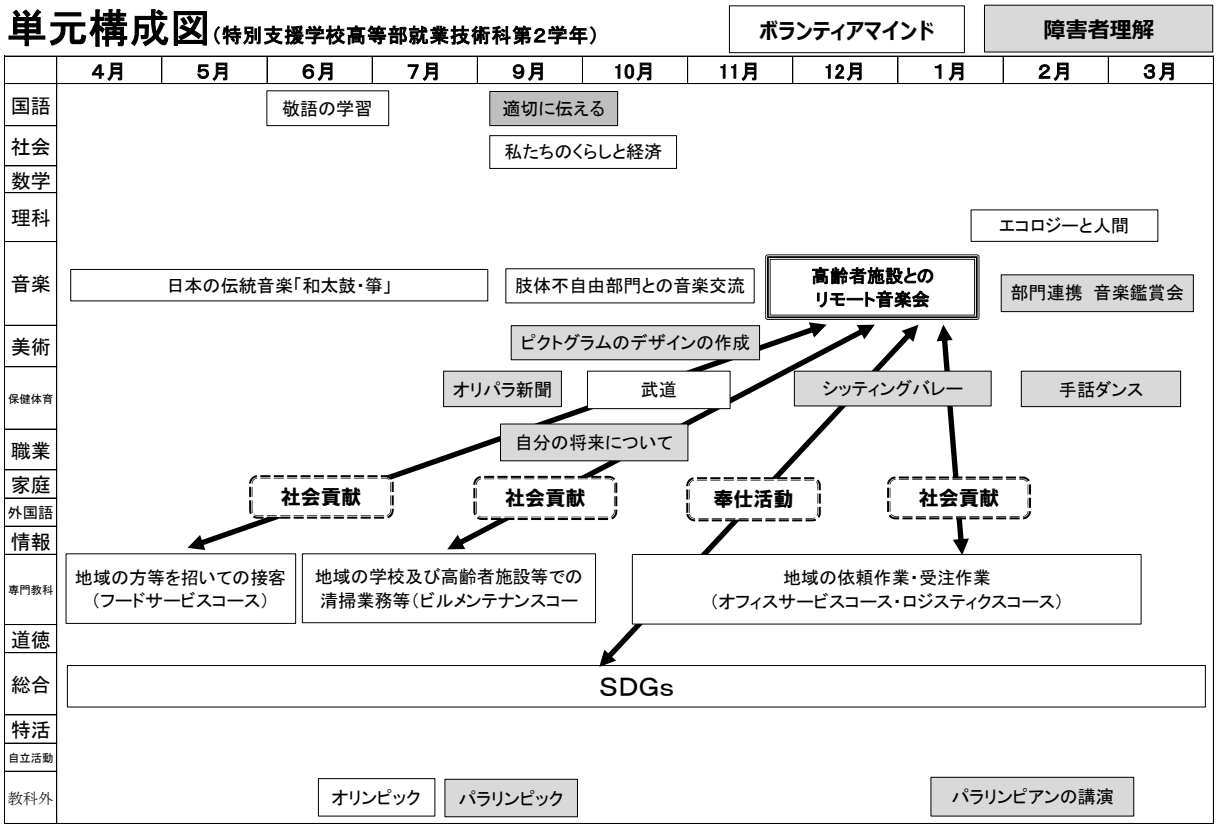
表２（６頁）に示した目指す児童・生徒の姿に迫るために、以下の指導を行う。

(1)　誰かのために演奏をする体験を通して、褒められたり感謝されたりすることの喜びを感じ、自分の役割やできることに気付き、自分を価値ある存在として捉えられるようにするためにリモートで高齢者施設の利用者の方に演奏を聞いてもらう場を設定する。

(2)　音楽を通して人のためにできることを考える場を設定し、ボランティアマインドを醸成する。

＜視点２＞　二つの資質に関連する単元構成図を活用した教育活動の工夫（図３）

教科等	学習内容
総合的な探究の時間	「学校・地域の中で今の私たちにできること」を考え、奉仕の心を育む。
職業に関する専門教科	地域の清掃活動や受注業務、カフェの営業を通して、社会に貢献する意欲や態度を育む。
キャリアガイダンスの時間	自分を知り、他者の存在を理解する。社会貢献について考える。
夏季休業期間	オリンピック・パラリンピックに関するレポートや新聞づくりを通して、自国文化理解や他国文化理解を深める。



【図３　二つの資質に関連する単元構成図（高等部就業技術科第２学年）】

＜視点３＞　東京 2020 大会を生かした授業づくり

東京 2020 大会の開会式の映像等を活用して、多様性の理解、自己理解・他者理解を高め、様々な文化や考え方を尊重する態度を育む。また、ボランティアの方々の働きに注目させ、自分たちができるボランティアについて考える場を設定する。

６　単元計画（全 10 時間）

時	●主な学習活動	評価規準	○オリンピック・パラリンピック教育との関わり ☆他教科との関わり
第１時 ～ 第２時	●東京 2020 大会の開会式の映像を見て、感想を伝え合う。 ●箏の立奏の姿勢や手の位置を思い出し、いろいろな音色を探求する。 ●肢体不自由教育部門との音楽交流のプログラムを考える。	【知】 【主】	○東京 2020 大会の開会式で使用された音楽に対する感想を伝え合う活動を通して、感じ方の違いを明確にして、多様性に気付くことができるようにする。 ☆国語科・英語科・体育科・情報「オリンピック・パラリンピックに関するレポート、新聞づくり」 ○演奏を届ける相手の立場に立って、どのような音楽が好きで、どのようにすれば喜んでもらえるかを考えながら、プログラムの内容を検討するように促す。
第３時 ～ 第４時	●中国雑技芸術団の鑑賞を通して文化や音楽の相違点について考え、ワークシートに感想を記入する。 【オンライン学習】	【主】	○中国の伝統や技術に触れ、両国の相違点について注目させるようにする。 ○中国のことを知り、他国と自国の文化の相違を考えるようにする。
第５時 ～ 第６時	●箏爪を付けて基本の奏法をする。 ●奏法譜の読み方を理解し、演奏する。 ●平調子と乃木調子の曲を演奏し、雰囲気の違いを感受する。 ●箏で「さくらさくら」を弾く。 ●トレモロやグリッサンドの奏法を知り、曲の最後に入れる。	【知】 【技】 【思】	○演奏を届ける相手に対して、どのようにすれば喜んでもらえるのか話し合う場を設定する。 ○演奏をする際は、自分の音だけでなく周りの音を聴くことや、心を合わせて演奏することの大切さに気付くことができるように声を掛ける。
第７時 ～ 第８時	●バチの持ち方、構え方を理解する。 ●糸の違いや音色を探求する。 ●「かごめかごめ」や「もののけ姫」の曲を三味線で弾く。 【外部講師「三味線」の演奏指導】	【知】 【技】 【思】	○日本のわらべうたや民謡に触れ、日本の伝統音楽について興味をもち、日本の音楽のよさに気付くことができるようにする。

第９時 ～ 第10時	●音楽交流の様子を鑑賞する。 ●高齢者施設の利用者にリモートで音楽を届ける。 ●平調子を感じて「さくらさくら」を弾く。 ●トレモロやグリッサンドを曲の最後に入れて演奏する。（本時）	【技】 【思】 【主】	○映像教材を使いながら音楽交流の様子を紹介する。 ○オンライン会議システムを活用して演奏を届け、演奏を披露した相手から感想を聞くことで、離れていても音楽を届けられる喜びを感じたり、自己理解を深めたりするきっかけとなるようにする。 ○相手が喜んでくれた経験を通して、ボランティアマインドについての理解を深める。

７　本時の指導（10時間中９・10時間目）

(1)　本時の目標

・音を合わせて演奏したり、トレモロやグリッサンドの奏法を習得したりする。

・平調子や和楽器の雰囲気を味わう。

・演奏を通して音楽を相手に届けようと主体的に取り組む。

(2)　本時の展開

時間	学習活動	◇学習活動の支援　■評価 ○オリンピック・パラリンピック教育との関連
導入 15分	1　本時の流れを確認する。 2　肢体不自由教育部門から届いた演奏に対する御礼のメッセージを見る。	◇本時の目標や流れを確認し、見通しをもって取り組めるようにする。 ◇演奏を届けた相手からのメッセージを見て、これまでの取組を振り返るとともに、音楽を届ける喜びを感じられるようにする。
	高齢者施設の方々に音楽を届け、音楽のよさを共有しよう	
展開 50分	3　リモート音楽会の流れを確認し、挨拶や演奏の奏法について確認する。 4　挨拶や進行を行う。 5　和太鼓と箏の演奏をする。 6　高齢者施設の方から、演奏を聞いた感想を聞かせてもらう。	◇高齢者施設とオンライン会議システムを活用してつなぎ、生徒が主体的に進行や演奏ができるように支援する。 ○演奏を披露した相手から感想を聞くことで、離れていても音楽を届けられる喜びを感じたり、自己理解を深めたりできる場を設定する。 ■トレモロやグリッサンドの奏法を習得しようと積極的に楽器に触り、活動に取り組んでいる。 ■演奏を通して、音楽を相手に届けようと主体的に取り組もうとしている。
まとめ 15分	7　感想を書き、演奏を振り返る。	◇webアンケートの集計機能を活用して感想を全体で共有する。 ○アンケートに答える中で、ボランティアマインドや障害者理解について考えられるようにする。

８　考察

(1)　成果

ア　演奏を聴いていただいた高齢者施設の方々から「今日はいい日」「とても良かった」などと涙ぐみながらリアルタイムで感想を聞くことができ、音楽のよさを共有することができた。生徒からも「他の先生にも聞かせたい」「これからも交流したい」など今後の行動につながる感想が聞かれ、ボランティアマインドの醸成につなげることができた。

イ　リモートでの音楽会は感染症対策のために企画したが、今後も「学校2020レガシー」として継続的に実施できることを教員間で共有することができた。

ウ　一人１台の学習者用端末を活用することで、アンケート結果をすぐに提示することができたり、発言が苦手な生徒も入力機能を使って意見や感想を発信したりすることができた。

(2)　課題

今後もリモート演奏会などの体験活動を通して二つの資質を育むためには、年間指導計画に位置付け、必要な人員や機材等の体制を整える必要がある。

Ⅶ　研究の成果と課題

１　研究の成果

(1)　二つの資質における発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿の明確化

発達段階に応じた目指す児童・生徒の姿を明確化して指導計画を立てることで、教科等の目標と関連付けながら、二つの資質を育むことができた。一人一人の違いを理解するとともに立場や生活、環境などの違いにも様々な種類があることに気付き、多角的な視点から、自身ができることを考えたり提案したりする姿が見られた。

(2)　二つの資質に関連する単元構成図を活用した教育活動の工夫

カリキュラム・マネジメントの視点から、年間を見通して二つの資質に関連する学習計画を立てることで、複数の教科指導から計画的・継続的に教育活動を展開することができた。次年度以降も継続・発展できる指導例を示すことができた。

(3)　東京 2020 大会を生かした授業づくり

東京 2020 大会開催年度という機会を生かし、各教科等で、大会の様子、施設、選手、ボランティア等を取り上げながら授業を行うことで、オリンピック・パラリンピックの意義について理解を深め、二つの資質を一層育むことができた。

(4)　一人１台の学習者用端末の活用

一人１台の学習者用端末を活用することで、友達が考えたことや感じたことをすぐに共有したり、一人一人の興味・関心に応じた学習活動を展開したりすることができた。

２　今後の課題

検証授業を通して、部員所属校の教員間で各教科等の関連性を重視した取組を共有することができたが、感染症対策を講じた教育活動を展開する必要があり、体験活動の充実や学校行事との関連が十分ではなかった。二つの資質を計画的・継続的に高める素地はできてきているので、今後、児童・生徒の実態に応じて教育活動を発展させ、レガシーとして継承していくことが必要である。

令和３年度　教育研究員名簿

小・特　合同・教育課題（オリンピック・パラリンピック教育）

学　校　名	職　名	氏　名
港　区　立　芝　浦　小　学　校	教　　諭	永 作　友 理 恵
八　王　子　市　立　七　国　小　学　校	主　任　教　諭	髙　尾　　和　宏
東　京　都　立　水　元　小　合　学　園	主　幹　教　諭	◎篠 塚　奈 緒 子

◎　世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部指導企画課
指導主事　中村　伸也

令和３年度

教育研究員研究報告書
小・特　合同
教育課題（オリンピック・パラリンピック教育）

令和４年３月

編　　集　東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０―６８４９